

# NHO病院の病理部門における がんゲノム医療の現状と課題

寺本典弘<sup>†</sup>第74回国立病院総合医学会  
(2020年10月17日～11月14日  
WEB開催)

IRYO Vol. 76 No. 2 (94-98) 2022

## 要旨

近年ゲノム医療に関する業務が重要な役割として病理診断科・病理部門に新たに課せられるようになった。国立病院機構（NHO）においては、『院長協議会提言』（2019）において『デジタル医療，ゲノム医療，再生医療などについても，国立病院としての役割の範囲内で積極的に関与していく』とゲノム医療について言及されている。NHOからがん医療ゲノム拠点病院（拠点病院）に3施設，がん医療ゲノム連携病院に10施設が指定されている。

本稿ではNHOの病理部門のゲノム医療に大切な業務や取り組み，NHO病理協議会参加病院38施設の内14施設が参加したアンケートの結果などを報告した『NHO内におけるがんゲノム医療の現状と課題』（第74回国立病院機構総合医学会・シンポジウム『がんゲノム医療時代の病理』）の内容について記述する。

ゲノム医療時代の病理部門には，next generation sequencing（NGS）やコンパニオン診断のため遺伝子や抗原の変性を押さえることのできる適切な病理業務手順の確立が必要である。シンポジウムでは四国がんセンターにおける対策の実例を提示した。アンケートによると，同様な対策は近年広く行われているコンパニオン診断においても必要であるので，ゲノム医療病院であるなしにかかわらず何らかの対策が行われていた。2020年8月までのゲノム検査の実績は，拠点病院である四国がんセンター（59件），九州がんセンター（72件）とその他の病院には大きな件数の差があった。

ゲノム医療における病理部門の役割は，正しい病理診断を行うこと，ゲノム医療時代に適した病理業務手順の確立，関係各部署との連携である。今はまだ体制整備の段階であるので，各施設において正しく管理されたホルマリン固定パラフィンブロック標本等の病理検体が提出できているかどうかは今後のNGS結果の集積が待たれる。

キーワード ゲノム医療，病理診断科，ホルマリン固定パラフィンブロック標本

## はじめに

近年ゲノム医療に関する業務が重要な役割として病理部門に新たに課せられるようになった。それに対応し，日本病理学会はゲノム医療に取り組むた

めの2つの規定を發布し，新たな専門医の認定も始めた（表1）<sup>1) 2)</sup>。

国立病院機構（NHO）内の病院ももちろん例外ではない。2019年の『国立病院機構 院長協議会提言』では、『デジタル医療，ゲノム医療，再生医療など

国立病院機構四国がんセンター 病理科，臨床研究センター がん予防疫学研究部 国立病院機構・病理協議会 †医師  
著者連絡先：寺本典弘 四国がんセンター 病理科 〒791-0280 愛媛県松山市南梅本  
e-mail：teramoto@shikoku.cc

(2021年4月20日受付，2021年8月6日受理)

Current Status and Issues of the Pathology Departments of NHO Hospitals in the Era of Precision Medicine

Norihiro Teramoto, NHO Shikoku Cancer Center

(Received Apr. 20, 2021, Accepted Aug. 6, 2021)

Key Words : genome medicine, department of pathology diagnosis, formalin-fixed paraffin-embedded tissue specimen